オープンカレッジ

愛知は「源氏物語」文化財の宝庫

時代を越えて後世に
文化や歴史を知る大切さ

名古屋経済大学
経営学部教授
四辻　秀紀

よつつじ・ひでき　古代中世絵画史、かな・料紙装飾史。前徳川美術館副館長。1955年生まれ。

紫式部によって著された「源氏物語」は、今からおよそ1千年前の平安時代に成立した。平成10（2008）年11月には、〝源氏千年紀〟のさまざまな行事や催し物がおこなわれ、これと前後して数多くの出版物が刊行されたことも記憶されている方は多いと思う。

「源氏物語」の本文は400字詰め原稿用紙で2400枚、物語は四代の天皇にわたる約70年におよび、登場人物はおよそ500人、トルストイの「戦争と平和」の登場人物に匹敵する。各時代にわたって読み継がれ、また与謝野晶子、谷崎潤一郎、円地文子や瀬戸内寂聴をはじめ、さまざまな人々が、それぞれの思いと立場で現代語訳を試みてきた。日本を代表する古典文学として世界的にも非常に有名な作品で、英語・フランス語・ドイツ語・中国語・ロシア語など抄出訳も含め、世界20言語に翻訳されている。

実生活の中では探し求めることがむずしい真実の姿を、近代小説を先取りするような虚構の物語に創造した「源氏物語」は、心理描写や美意識に対する深い観察、抒情（じょじょう）性などに優れ、後世の物語や和歌をはじめとする文学作品に留まらず、絵画・調度品や衣服など美術工芸の分野にも大きな影響を与えてきた。

また「源氏物語」の絵画化は、現在に至るまで絵巻や冊子、扇面、色紙、屏風など、さまざまな形式で描かれ、「源氏絵」と呼ばれる日本絵画史のうえでも重要なジャンルを形成してきた。先に記した現代語訳の挿図をはじめ、大和和紀の漫画「あさきゆめみし」も、現代を代表する「源氏絵」といえよう。

愛知県下には、このような「源氏物語」の重要な写本や美術工芸品が伝えられている。まず筆頭にあげられるのが、12世紀前半に当時の宮廷で制作・享受されたと考えられている国宝「源氏物語絵巻」（徳川美術館蔵）で、物語絵巻として現存最古の作品であるばかりでなく、「源氏絵」の原点に立つ名品として世界的にも有名である。

さらに13世紀に源光行・親行によって校訂された皇重要文化財・河内本「源氏物語」（名古屋市蓬左文庫蔵）、「源氏物語」の「初音」や「胡蝶」の帖にちなむ意匠を施した、徳川三代将軍家光の長女・千代姫の婚礼調度として知られる国宝「初音の調度」（徳川美術館蔵）など、それぞれの分野で頂点に立つ遺品ばかりである。

このほかにも博物館・大学図書館施設や個人に所蔵される古写本・注釈書をはじめ絵画、工芸品など、重要な「源氏物語」に関連する作品が点在しており、まさに愛知は「源氏物語」に関連する文化財の宝庫ともいえる。

昨今提唱されているように文化財の活用は必要であろう。身のまわりには、案外知っているようで、意識されていない文化財が少なからずある。時代を越えて後世に伝えていくべきゆえに、これらに光を当て、そこに息づいてきた文化や歴史を知ることが先ず大切だと考える。

Ｃ中部経済新聞社
２０１９年１１月１８日　００６面　０１版　Ｎｏ．０２